

最初の小金井桜 18世紀

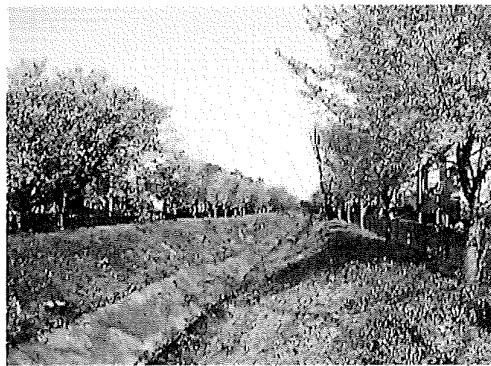
文人の 武蔵野

小金井といえば桜、という評判はどこからきたのでしょうか。並木仙太郎は「小金井の名」が「櫻花によりて現はる」としていますが、「現はる」のはいつ頃からのことなのでしょう。

武蔵国の小金井は、大和国吉野や常陸国櫻川のように、山桜が群生していた地域ではありません。小金井に最初に桜樹が植栽されたのは18世紀です。起源には諸説ありますが、1737年のことだとされています。

並木仙太郎 ⑥

江戸の桜の起源も未詳ですが、将軍家綱が隅田川沿岸に桜並木を整備し、吉宗がそれを引き継ぎ1717年にさらに植栽し、やがて玉川上水沿いにも植えられたようです。



玉川上水沿いに咲く小金井桜の並木（小金井市教育委員会提供。2022年4月撮影）（小金井市で）

場所は、羽村から江戸城に水を運ぶ玉川上水沿い（梶野橋から小金井橋の間）。大和国吉野と常陸国櫻川を中心とする諸国の各種がまじえられて選ばれました。

ちなみに、今日の桜を代表する品種である染井吉野が江戸で開発されたのは、それよりも後のことです。さらに、ソメイヨシノという和名が誕生し、葉よりも先に花を咲かす便利なクローンとして重宝され、桜と言えばソメイヨシノのことを指すほどに爆発的に本数が増えていくのは、20世紀に入ってからのことになります。

幕府の命を受け、小金井で桜樹の植栽の指揮を執ったのは、川崎平右衛門定孝でした。川崎は、武蔵国多摩郡押立村（現・府中市）出身の名主であり、小金井を中心とする武蔵野の新田の開発に尽力し、

地元の貧民の救済にも努めた人物です。

18世紀の前半に地元で愛された名主のもとで桜の植栽が行われ、「小金井の名」が「櫻花によりて現はる」ことになった、という一編のストーリーを語り、この項目を終えることができたならよかったのですが、実際にはそうではありません。小金井といえば桜という評判が定着し、「江戸名所図会」（1834年・1836年）に掲載されるに至るまでには、19世紀、文人・佐藤一斎の観桜を待たねばなりませんでした。

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。

